

C 班報告 マスメディア (TV 局) 2025N 社

同志社大学 社会学部 社会学科
藤本ゼミ
西山 結唯 古賀 湧帆

SNS が普及した現在においても、TV が世間に与える影響は依然として大きい。その中でも、特に情報の速さと正しさが求められる報道領域の AI の職場実装について調査を行いたいと考え、TV 局の報道記者 n 氏にお話を伺った。

2025N 社の報道部では、テレビでのオンエアとウェブニュースの作成を行っている。報道記者の仕事内容としては取材、原稿の執筆、編集マンとの映像編集がある。それから最後に世の中に出すという意味で、中継やスタジオ解説、VTR のオンエアを行う。記者は基本的には 1 人で動くが、取材に行くとなるとカメラマンと音声スタッフを合わせた 3 人 1 チームで動くことが多いということであった。記者の業務のうち、人脈形成に関しては人間にしかできないものであり、これは AI でも他の何でもできないということであった。報道記者にとって、取材に応じてくれる相手との関係構築は極めて重要である。取材の可否や、どこまで踏み込んだ話を引き出せるかは、記者と取材対象との関係性に大きく左右される。「自分だからこそ語ってもらえる内容がある」という点に、記者のやりがいがつまんでいると感じた。

2025N 社の報道現場では、主に文字起こしと WEB ニュース制作において AI が活用されている。3、4 年前から AI を用いた文字起こしアプリが導入されたものの、取材現場は必ずしも静かな環境とは言えないことに加え、一度限りの現場での取材では新たな試みを行うことも難しい。そのため、取材の記録については依然として紙やスマートフォンでのメモが主流となっており、AI による文字起こしは現時点では補助程度での利用である。

一方で、特に AI の活用が進められているのが WEB ニュース制作である。N 社は 1 年ほど前から他社と連携し、原稿と画像から縦型のショート動画を作成して複数のニュースサイトや動画サイトに配信できるシステムを構築した。ネットニュースは速報性が重要視されており、より早く公開されたニュース記事から閲覧数が伸びる傾向がある。これまでは編集や翻訳、複数媒体へのアップロードに多くの人員と手間が必要だったのに対し、このシステムを利用することで、1 人で 10 分ほどの時間で制作し、配信することが可能となっている。また、現場の記者から送られる静止画 2、3 枚と指定した原稿を合わせて速報を素早く出すことで、速報性を確保している。このシステムについては、現在も実証実験が進められており、今後さらに WEB ニュース制作において自動化が進むと考えられる。

また、同じく 3、4 年前からこれまでテープで管理していた映像素材のデータ化・クラウド化が社内で行われている。報道現場には、個人情報や災害映像など機密性の高い情報が多く集まるため、情報の秘匿性の確保が重要となっており、外部委託が難しいという事情から社内に対応を行っている。

ただし、地上波のニュースにおけるテロップ入力には依然として全て手作業で行われている。これは災害時などの緊急事態に対応できないリスクを減らし、緊急時でも迅速に情報を届けられる体制

を維持するためである。また、こうした緊急時対応の想定が放送局に「紙文化」が残る理由の一つとなっている。

報道記者は多くの取材を通して、社会で起こる出来事や様々な立場にある人の思いや現状を多くの人々に伝える役割を担う。一次情報の取得や取材相手の思いを丁寧に拾い上げる人と人との関わりが重要な仕事である。こうした中で、放送局や報道記者のもとには過去の放送素材や未公開の取材内容など膨大な情報が蓄積するため、情報の整理や適切な管理が必要である。今後、こうした情報の整理や WEB ニュース制作などの記者の主業務を支援する位置づけでの AI の活用が期待できる。



***イメージイラストはAIで生成**